

誰か後ろの扉をトントンとたたく者がありました。今頃、誰だろう、ゴーシュは思いました。「ホーシュ君かい。」ゴーシュはわざと寝ぼけたように叫びました。ところがスウーッと扉を押して入って来たのは今まで五、六回見たことのある大きな三毛猫でした。ゴーシュの畑からとった半分熟したトマトをさも重そうに持って来て、ゴーシュの前におろして言いました。「ああ、くたびれた。なかなか運搬は大変だな。」「何だと。」ゴーシュが言いました。「これは、お土産です。食べてください。」三毛猫が言いました。ゴーシュは昼からのむしゃくしゃをはらすように怒鳴りつけました。「誰がきさまにトマトなど持ってこいと言った。第一オレがきさまらの持ってきたものなど食うものか。それからそのトマトだってオレの畑のやつじゃないか。何だ、赤くもならないやつをむしって。今まで、トマトの茎をかじったり、けちらしたりしたのはお前だろう。早く帰れ。憎らしい猫め。」すると猫は肩をまるくして目をすぼめてはいましたが、口のあたりでニヤニヤ笑って意味ありげに言いました。「先生、そうお怒りになっちゃ、お体にさわります。それよりシューマンのトロメライをひいてごらんなさいませ。聴いてあげますから」「生意気なことを言うな。猫のくせに。」セロひきはしゃくにさわって、この猫のやつをどうしてくれようとしばらく考えました。「いや、ご遠慮はいりません。どうぞひいてください。私はどうも先生の音楽をきかないと眠れないのですから。」